



TITLE:

# <シンポジウム 米英における英語教育> 米国における英語の試験

AUTHOR(S):

大浦, 幸男

---

CITATION:

大浦, 幸男. <シンポジウム 米英における英語教育> 米国における英語の試験. 英文学評論 1964, 15: 21-32

ISSUE DATE:

1964-03

URL:

[https://doi.org/10.14989/RevEL\\_15\\_21](https://doi.org/10.14989/RevEL_15_21)

RIGHT:

tion の結びつけも十分ではない。それに oral approach はあく迄も英語学習への approach の第一段階のことであって、日本の大学におけるような advanced class の扱い方ということになると、誰からも満足な答を得られない。英語教育の文化的側面ということにしても、言語的側面との関連の具体的研究がない。文化面における contrastive analysis も必要な筈であるが未だなされてはいない。前述した Generative Grammar の応用も今後のこと、等々。

初めの予定では、最後にわが国の英語教育の問題点を具体的に指摘するつもりであったが、ここまで述べ来って考えてみれば、わざわざそうする迄もなく、問題点は既に明らかであり、ただ一言、何はともあれ一日も早く英語教育を学問研究の対象にせよ、と警告すれば足りると思う。そしてそれにつけても私は、今後なすべく背負わされた問題が余りにも多いのに驚いているのである。

## 米国における英語の試験

大 浦 幸 男

試験というものは、単に個々の学生の学習の結果をテストするだけのものではなく、試験の形式や、内容が、その科目の学習上の目標を示すものだから、極めて重要な意義のあるものというべきである。例えば、わが国において、大学の入学試験が高校の教育に大きな影響を与えていることは、否定しがたい事実だ。筆者は、1963年1月30日に渡米し、約三カ月間、外国語としての英語教育の実状を視察したが、その際に興味をもって調査したことの一つに、米国における英語のテストの問題があったから、その概要を次に述べることにしたい。

まず、筆者が最初の七週間を過した UCLA (University of California at Los Angeles) は、創立は新しいが、近年急速に拡充しつつある米国西海岸有数の大学であって、外国人留学生は多数にのぼり、日本人学生も百人以上いた。ここでは、外国人留学生はすべて入学の初めに、英語のテストを受けねばならぬ。その成績に従って、英語の履修の有無、及

び期間が決定されるのである。すなわち、85点以上を得た学生は、特別に英語を履修する必要はない。65—85点は、一学期間、いわゆる intermediate English（中間英語コース）の上級、50—65点は、一学期間下級の intermediate English に出席し、その後上級の intermediate English を取らねばならぬ。それぞれ週5時間である。50点未満は elementary English（初級英語コース）に出なければならぬ。なお、この場合は、週10時間英語ばかりを勉強し、その間は、他の講義に出席できない。また、実際この程度の英語の学力では、ふつうの講義はとうてい理解できぬと思う。これも期間は一学期である。だから、50点未満の者は少くとも一年半、50—65点の者は一年間、65—85点の者は半年間英語を学ばねばならぬことになる。このように学力に応じて、英語履修の期間、及び程度を違える、というやり方は、なかなか面白いと思う。わが国では全部の学生（英語は外国語の一つの選択科目に過ぎぬが、事実上全部の学生が履修している）にたいして無差別に、例えば京大の場合には、週四時間を二年間にわたって履修させているが、入学時に試験を行ない、その成績に従って、ある者は二年、ある者は一年、または全く履修を必要としないなどと、能力別に分けることも、外国語教育の能率化をはかる一つの方法ではないかと、筆者は考えている。つまり、大学卒業生としての標準となる英語の学力を測定する試験方法を確立し、それを英語学習の目標とするのである。従って、入学時にすでにその目標に達している優秀なる学生は、入学後は、それぞれの学力を生かして専門書を読破するように早くからさせればよい。そのためには、専門書購読の時間を大幅に増やせばよいし、また専門に偏せざる一般英語を更に深く学びたい者のためには、上級の英書購読のためのセミナール形式のクラスの開設が望ましい。その他、時事英語、英作文、視聴覚教育によるヒアリング、スピーキングなど、やるべきことはいくらかでもあるのである。それを全く無差別に全学生に週四時間二年間履修させるのは、余りにも機械的、非能率的だと、筆者は考えざるを得ないのである。

以上は、外国人留学生のための英語のテストだが、カリフォルニア大学では、（必ずしもカ大だけでなく、全米の大学で行なっているが）米国人のための英語のテストを、入学時に行なっている。これは、正しい英語を書く能力、すなわち spelling, grammar, sentence structure, punctuation において大きな間違いなしに英語が書けるという能力をテストするのである。つまり、最高学府を出た者が、つまらぬ間違いをしては、大学の権威にかか

わるというわけである。もしこの試験に落ちると、一学期間英語の授業を受けなければならぬが、この授業は単位外になる。

次に、カリフォルニア大学で行なっている外国人留学生のための英語の試験の内容を具体的に述べることにしよう。まず、試験は五部より成るが、その第一部は Dictation である。これは、日本で従来行なっている書取と同じく、第一回はふつうの速度で試験官が読むのを聞いており、第二回に少しづつ読むときに書き取り、第三回に訂正するのである。なお、punctuation (comma, period など) は、言ってくれる。これが二題で15点。

第二部は Perception of English Sounds, つまりヒアリングのテストである。例をあげると、

Is he going to (A) sail (B) sell the ship?

と印刷されており、試験官が実際に読んだのは (A) [seil], (B) [sel] の何れか、を聞き分けるのである。これは大してむづかしそうには思えぬが、実際の受験生の答案を見ると、boat と bote, these と d's, cod と cud などを間違えている。30題で15点。

第三部は Grammar, これは各問題に三つのセンテンスが印刷してあり、そのうちの一つだけが文法的に正しいのである。

- (A) The bank is opposite the theater.
- (B) The bank is opposite to the theater.
- (C) The bank is opposite of the theater.

(A)が正しいわけで、これは前置詞の問題である。その他、動詞と前置詞の続き具合とか、冠詞の問題などがある。50題で25点。

第四部は Vocabulary. これは一連の文章があって、その中のアンダーラインをしてある単語の意味について、それぞれ三つの答えがある。その中の一つがこの場合には妥当するのである。

(例) Truth is mighty but it must wage an incessant and unequal war against well-nigh immortal error.

wage には (A) pay, (B) earn, (C) fight の答があり, incessant には (A) ceasing, (B) unending, (C) inconstant の答が印刷してある。筆者の見た答案では, well-nigh の答を almost とすべきところを, well-developed の方にマークしていた。全部で20語あり, 計20点。

最後の第五部は Composition。トピックが四つ掲げられてあり, その一つを選び, 約200語で作文するのである。四つのトピックというのは, ——

- 1 君の知っている興味ある人について述べよ。
- 2 君の国の興味ある場所について述べよ。
- 3 君の国で最近に起った変化を論ぜよ。
- 4 君の国の芸術の一つを取りあげて論ぜよ。

なお, 作文の採点はしばしば主観的になりやすいが, 一つの間違ひに対して一点を引くという風に比較的客観的な採点をしている。この作文が25点で, 合計100点となる。

上述のごとく, 問題は五部よりなるが, そのうち, 第一部 Dictation と, 第五部 Composition が総合的能力をテストし, 第二部から第四部までが, Sound, Grammar, Vocabulary をそれぞれテストすることになっている点は面白い。というのは, フリーズ以来, 外国語学習上最も根本となるものが, まず sound system であり, ついで sentence pattern その他の grammatical structure, 最後に vocabulary となっているからである。なお, 総合的能力のテストとしては, aural comprehension (耳による理解) 及び spelling の正確さをテストする dictation と, 全体を総合した作文能力をテストする composition を行なっている。このようなテストと, わが国における入学試験その他の英語のテストを比較すると, まず, aural perception or comprehension のテストが, 日本では欠けているか, または著しく少ないことに気づく。こういう音声にたいする無関心が, 日本人に特に顕著に認められるヒアリングの弱さとか, 発音の悪さを引き起すのである。もっとも, この UCLA の試験は, すでに渡米し, 英語による講義を理解する必要に迫られている学生

を対象とするものであるから、大半の学生は英書購読を目的とする日本の場合とは異なるかもしれない。しかし、それにしても、言語はまず音声にもとづくことが、フリーズ以来の定説となっているのだから、aural comprehension にたいしては、日本においても、もっと関心をもつべきであろう。また、最後の英作文については、「聞く」「読む」「話す」「書く」という四つの能力のうち、最もむづかしいのは、言うまでもなく、書く能力である。例えば、国語としての英語、つまり、アメリカ人の英語の場合、「聞く」と「話す」は子供のときから始めているし、「読む」ことも、さして難事ではない。そこで、「正しく書ける」ことが、問題となるのである。わが国でも同様に、「正しく書ける」ようになれば、当然「正しく読める」はずである。

次に Michigan 大学の English Language Institute の試験について述べたい。ここでは、八週間を一コースとする Intensive Course が有名である。筆者は丁度その卒業式に列席することができたが、留学生の国籍は二十有余にのぼり、一国の学生の数の多い方から、日本は第二位であったので、大いに欣しく思ったのであった。この Intensive Course の最終テストは、Aural Comprehension, Grammar, Vocabulary より成る。共に一時間づつである。Aural Comprehension のテストの一例をあげると、“The camera on the desk is expensive.” というのが、テープにレコードされている。もちろん、これはその場で口頭で言っても良いわけだが、それを聞かせてから、すでに印刷してある三つの文のうちの妥当するものを選ばせるのである。すなわち、

- (1) The camera is expensive.
- (2) The desk is expensive.
- (3) The camera and the desk are expensive.

のうち、(1)が正しいということになるのである。もう一つ例をあげよう。まず、テープで“Swimming alone is never a good idea.”を聞かせる。解答用紙には、次の三つが印刷してある。

- (1) Swimming is not the only good idea.
- (2) A person should not swim alone.
- (3) A good idea is never alone.

(2)が正しいわけである。なお、試験官が口頭、またはテープで読んでから、12秒空白があり、その間に受験者は、解答の三つの文を読んで、その一つを選ぶのだから、敏速に耳で聞きとり、目で速読して、とっさに判断しなければならぬ。これを100題やり、所要時間は約一時間である。カリフォルニア大学のは、aural perception で、音を正確に耳で識別する力のテストだが、ミシガン大学のは、耳で聞いた文章を頭で理解 (comprehend) する力のテストだから、より複雑なわけである。

第二の Grammar のテストは、下の如くである。

- |                       |               |
|-----------------------|---------------|
| “What is that?”       | (1) calls     |
| “It _____ a bicycle.” | (2) is called |
|                       | (3) calling   |
|                       | (4) called    |

左側の下線を引いたブランクのところに当てはまる言葉を、右側の四つの中から選ばせるのである。答は (2) is called となる。

もう一つ例をあげよう。

- |                                |                    |
|--------------------------------|--------------------|
| “Elizabeth didn’t meet me      | (1) would meet     |
| when I arrived.”               | (2) met            |
| “If you had come by train,     | (3) would have met |
| she _____ you at the station.” | (4) had met        |
|                                | 答 (3)              |

次に Vocabulary のテスト。これは上記の Grammar のテストに割合に似ている。例

えば、

- “What will you study?” (1) at  
“My program this summer takes (2) around  
\_\_\_\_\_ many courses.” (3) in  
(4) over  
答 (3)

このように動詞と前置詞との collocation の問題も含まれているが、一方純粹に単語の問題もある。

- “Must all children in the United (1) compulsory  
States go to school?” (2) conditional  
“Yes, attendance is \_\_\_\_\_.” (3) conscious  
(4) compelling  
答 (1)

次に、高校卒業程度の achievement test について述べたい。米国では、大学への入学試験がないために、大学入学志願者の成績の資料として、achievement test がかなり重視されているからである。それを行なう団体として College Entrance Examination Board というのがあり、その本部が、ニューヨークのコロンビア大学のすぐ傍にある。この団体には、多数の中等学校が加入しておる他、約五百の大学が加わっており、毎年総会を開いて、委員会の研究した活動要項を決定している。ここで行なっている achievement test の内容を次に紹介しよう。

まず、「英語」「外国語」「歴史並びに社会学」「数学」「科学」の五種類のテストよりなる。「英語」は、米国人にとっては国語となるので、後から触れることにしたい。「外国語」は、現代語と古典語とより成る。現代語については、仏独露スペイン語などがあり、それぞれ、Situation questions, Usage questions, Vocabulary questions, Reading



comprehension questions などがある。

Situation questions とは、日常の生活環境において使われる言葉をどの程度に知っているかをテストするのである。例えば、「電話のベルが鳴ると、ヘレンはこう言った」とあって、次に四または五の文が書いてあり、そのうちの最も適当なのを選ぶのである。

Usage questions と、Vocabulary questions は、文章の中に、ブランクのところが一個所あり、それに適当する言葉を、次にかかげてある数個の単語の中から選ばせるのである。上述のミシガン大学のテストの grammar, vocabulary と同じ趣向である。

Reading comprehension questions は、100 乃至 300 語の文章が印刷してあり、その中の単語や、フレーズに関して、同じ意味の単語を選択させるとか、文章の内容についての質問をするとか、するのである。つまり、わが国の英語の試験に直して言えば、単語、フレーズ、またはセンテンスの日本語訳（もっとも選択式だから、答が四通りほど書いてあり、それを選ぶのであるが）と、文章の全体、または部分の内容について、英語の質問があり、その答が英語で四通りほど書いてあって、その一つを選ぶ、ということになる。

以上の如き筆問筆答のテストの他に、1960 年から口問筆答のテストが加ったそうである。これを Listening Comprehension Test といい、その種類には、“Logical-illogical” questions, Conversation questions, Situation questions, Listening Comprehension passages がある。

“Logical-illogical” questions とは、受験者は、試験官が口頭で短い対話を述べるのを聞いていて、第一の話者に対して、第二の話者が正しく受け答えをしておれば、logical, そうでなければ illogical と答えるのである。もっとも、これでは、デタラメでも50%の正解率が出そうだ。

Conversation questions は、口頭で質問が行なわれ、それに対して四つの答が印刷してあり、その一つを選ぶのである。

Situation questions は、口頭の対話を聞いていて、四つの答の中から、その対話の行なわれた場所を選ぶのである。

Listening comprehension passages は、約100語位の会話、講演、演説、報道、劇の一部などをまず聞かせるのである。それに対して、同じく口頭（またはテープ）で質問をする。それぞれ四つの答が印刷してあり、その一つを選ぶのである。しかし、約100語と

いえば相当長いから、記憶の良否が関係してくる。そこで、二度繰り返して聞かせるのである。

以上が、高校卒業、大学進学希望者に対して米国で行なわれている外国語の achievement test の内容である。もっとも、College Entrance Examination Board は、その方面の権威者を網羅し、毎年の実績を参照して、たえず研究、改善しているので、将来はまた変化してゆくかも知れぬが、日本においても、試験のもつ重大性を認識すれば、試験問題の形式内容について一層の研究を積み、その改善に努めるべきである。

以上で一応外国語としての英語のテストに関する説明を終ることにするが、最後に、より高い英語の一つの目標を示すものとして、「国語としての英語」、つまり、米国人の受ける英語のテストについて附言しておきたい。既述の如く、大学卒業生として恥づかしからぬ英文が書けることが、どの大学においても要求されているのだが、College Entrance Examination Board の英語のテストも、主として書く能力を試す English Composition Test より成る。これは、作文能力の三つの点、つまり、表現の正確さと効果、文の構成能力、言語使用における趣味と感受性をテストするのを眼目とする。

まず、表現の正確さと効果をテストする問題の例を次に示そう。

(例) She accused me for having forgotten to lock my desk last night.  
                  A    B    C                    D  
                  No error  
                  E

ABCD の何れかに誤りがあるか、または E の誤りなしかである。B の for は of とすべきだから、答は B となる。このような問題が出るところを見ると、米国人でもこのような間違いをする可能性のあることがわかる。

(例) Since a stereo record can be manufactured in much the same way as a monaural record, it can be sold near the price, or the same price as, a monaural record.

下線の部分を書き改める場合に、下記の何れが良いかという表現の効果のテストである。

- (A) near the price, or the same price as,
- (B) like, or almost like, the price of
- (C) at the price of, or near to the price of,
- (D) at about the same price as
- (E) close to it, or identical with the price, of

(A)は原文が良いということである。答, (D)。

- (例) 1. One of the sources of the king's income was an entire monopoly of the whole manufacture and sale of salt.
2. He did not think of cooling the furnace first, or that to put cold water in a hot-water boiler could be dangerous.
3. While the chemist was experimenting in his laboratory, he detected a new cleansing compound.
4. The razor's edge of the wind cut at his face cruelly and tugged at his clothes like a frightened child.
5. Perhaps she feared Nemesis, although assuredly she knew not who or what Nemesis was.

以上の問題において、(A) diction に間違いある場合、(B) 冗漫、(C) 陳腐な表現、(D) 文法に誤、(E) 以上の誤なきもの、の五つの場合があり、それを指摘させる問題である。答, 1 (B), 2 (D), 3 (A), 4 (C), 5 (E)。この問題は、単に英語の文法だけでなく、修辭的な問題も含む表現の正確さと効果を調べるテストなのである。

第二の文の構成力のテストには、次のような問題がある。

- (例) (A) Since his day it has undergone change.
- (B) President James Monroe announced it in 1823.
- (C) Its primary purpose, security for the Republic, has, however, remained

the same.

- (D) The Monroe Doctrine, one of the most famous statements of American foreign policy, has been in effect for more than a century.

以上の四つの文が順序不同に並んでいるので、それを適当な順に並べて一つの文章にせよという問題である。his, it, its, however などが手掛りになるから、これらを考慮に入れて論理的に配置すれば良いのである。答、(D) (B) (A) (C)。

- (例) 1. The Roman roads connected all parts of the Empire with Rome.  
2. The Roman roads were so well built that some of them remain today.  
3. One of the greatest achievements of the Romans was their extensive and durable system of roads.  
4. Wealthy travelers in Roman times used horse-drawn coaches.  
5. Along Roman roads caravans would bring to Rome luxuries from Alexandria and the East.  
6. In present-day Italy some of the roads used are original Roman roads.

以上の文章のうち、(A)中心的なテーマを述べているもの、(B)それを支持する考えを述べているもの、(C)それを例証する事実、(D)あまり関係のないもの、がある。それをそれぞれに指摘させるのである。答、1 (B), 2 (B), 3 (A), 4 (D), 5 (C), 6 (C)。

次は趣味と感受性のテスト。

- (例) In recent times, works of nonfiction have begun to threaten the popularity of the novel. The large sales of guides to the good life, of biographies of influential men, and even of some historical narratives suggest a change in literary taste. Does this mean that people are beginning to prefer fact to fantasy, or is it a symptom of the decline of the novel as a living art form? .....

上の文章の最後の部分、つまり点線の部分に、次の五つの文のうちの何れを入れれば良いか、という問題である。

1. Up until this moment, not a single soul has come up with a skilled answer to this dilemma.
2. Neither the literary critics nor the publishers has provided a satisfactory explanation for this phenomena as yet.
3. No critic or publisher has yet offered a reasonable explanation of this trend.
4. No one can deny that critics and publishers exert an influence upon literary taste.
5. Up to the present, neither critics nor publishers have yet offered a reasonable explanation of this trend.

答は3番であるが、その他の四つについても、(A)意味が不適當、(B)調子や語法が不適當、(C)文法的に誤、(D)冗漫、の何れに当るかを指摘さす。答、1 (B)、2 (C)、4 (A)、5 (D)。

以上が、選択方法による解答を行なう問題 (Multiple-choice questions) であるが、その他に Free-response exercise というものもある。これは、300—500 語の文をかかげ、それには文法上の誤、明晰でないところ、emphasis の足りないところなどが含まれている。それを単語を書き足したり、削ったり、一部を書き改めたり、順序を変えたりして、立派な文章に直す、という問題である。

以上述べた如く、「国語としての英語」のテストは、単に語学的であるにとどまらず、かなり修辭的、文学的なものだが、英文学の講読が語学としての英語の習得に貢献すると同じく、「外国語としての英語」の習得の場合にも、単に文法的のみならず、文学的にもすぐれた文章が書ける、ということが、学習の最高の目標となるわけである。